

3. 聴覚障害に関する基本的な理解と支援の手立て

(1) 聴覚障害の概要

聴覚障害のある幼児などは、音や声が聞こえない、あるいは聞こえにくいという困難さを抱えています。聞くことが難しいという意味で、難聴ともいいます。聞こえにくいいため、他の幼児とのコミュニケーションが上手くとれなかったり、先生の指示が分からなかったりします。また、幼児は、保護者や先生、他の幼児とのやり取りなどを通じて言語を獲得していきませんが、難聴により聞こえにくいと、言語が獲得しにくいといった課題もあります。

(2) 聴覚障害のある幼児などに見られる行動等の特徴

障害の状況により、補聴器で音を大きくすることで聞こえやすくなる場合と、音がゆがんで聞こえるためにそれが何の音なのかをはっきりと聞き分けることが難しい場合があります。

また、両方の耳に難聴がある場合と、片方が正常で片方の耳に難聴がある場合があります。片方の耳のみ難聴がある場合、正常な耳から聞こえる音を頼りに生活しています。しかし、幼児期は、聞こえる方の耳を使えるような工夫（話し手に聞こえる方の耳を向ける等）にまだ慣れていないので、聞こえたり聞こえなかったりします。なお、片耳が正常であることから、発音はおおむね自然でも、聞こえてきた音の方向性が分からないなど、聞こえ方には不自由さがあります。

具体的には、難聴の程度によって次のような特徴が見られます。なお、幼児期は、言語を使った表現は未熟であったり、夢中になると周囲の音や声に関心を示さなくなったりする時期であることに十分に留意する必要があります。

軽度難聴	・ 一対一の会話は支障がない ・ 集団の中では、周囲の騒音に妨害されて聞き取れないことがあり、聞き返しが多くなる
-------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・言語の力が伸びにくかったり、先生の指示が聞こえなかったり、他の幼児といざこざが生じる場合がある
中等度難聴	<ul style="list-style-type: none"> ・静かな環境であれば、通常の話し声を聞き取ることができるので、家庭内での生活上の支障は見逃されやすい ・言語の発達の遅れや、「らくだ」が「らくら」になるなど、発音の未熟さやひずみなどが見られる ・コミュニケーションへの影響が大きくなり、他の幼児との関わりに支障が生じる場合がある
高度難聴	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な調整を行った補聴器を装用すれば、音声（話し言葉）で、会話を聞き取ることができる場合もある ・言語の発達の遅れ、発音の不明瞭さなどが見られる ・周囲から疎外感を感じたり、自尊心が傷ついたりする場面が出てくる
重度難聴	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な調整を行った補聴器を使用すれば、言葉のアクセント、抑揚、リズム等や母音は聞き取ることができる場合もある ・コミュニケーションを行うための重要な手段として、写真や絵カードの提示、ジェスチャー、簡単な手話などの、視覚的な情報の活用が有効となる ・自然に言語は育たないため、早期からの支援が必須である
片側だけの難聴 (一側性難聴)	<ul style="list-style-type: none"> ・小声や離れたところの会話を聞くことが難しい ・通常の音や声の方向性を判断することが難しい ・周囲が騒がしかったり反響したりすると、会話を理解することが一層困難となることもある

(3) 聴覚障害のある幼児などの抱える困難さに応じた支援の手立て

幼児が話を聞くときは、始めは静かに聞いたり、話の内容の全てに注意を向けて聞いたりしているとは限りません。他の幼児の話の聞かないでいざこざが生じることもあります。しかし、話を聞くことに関わる様々な体験を積み重ねる中で、親しみを感じている先生や他の幼児の話に興味や関心をもち、自分から聞くようになり、安心し

て自分の思いや意思を積極的に言語などで表現しようとしています。

しかし、聴覚に障害のある幼児などは前述のような経験が不足したり、他の幼児とのコミュニケーションが上手くとれなかったり、情報（音声言語）が入りにくいために他の幼児と感動や達成感を共有しにくかったり、自らの興味や関心、感動を思わず言語で表現することができなかったりすることがあります。

聴覚障害のある幼児などが、遊びや生活の中でどのような困難さを感じ、そういった困難さに応じてどのような支援の手立てがあるのかを考え、当該幼児の実態に応じた支援をしていくことが大切です。聴覚障害のある幼児などの困難さや困難さに応じた支援の手立てとして以下が考えられます。

①聴覚障害のある幼児などの抱える困難さ

困難さ	行動等の特徴
聞こえにくい	<ul style="list-style-type: none">○日常の場面で、苦手なこと<ul style="list-style-type: none">・後ろや横から話しかけられること・よく似た言葉を聞き分けること・二人以上の声を聞き分けること・何かをしながら、同時に聞くこと・子音（特に「さしすせそ」）を、聞くこと、話すこと・合唱や合奏をすること○大事なことを聞きもらしたり、聞き間違えたりすることが多い<ul style="list-style-type: none">・園生活での身の回りの始末等の習慣を身に付け、行動できていることを、「聞こえているようだ」「やり取りはできている」と判断されてしまう・目から情報を得ようとする様子が、落ち着きがない、集中力に欠ける行動ととられ、別の障害と間違われることもある○危険に気付きにくい<ul style="list-style-type: none">・園外保育時や登降園時に車のクラクションや自転車のベルなどもよく聞こえない

<p>分かりにくい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会話を理解するために一生懸命聞き取ろうとするが、十分聞き取れることは難しい ・聞き取ることができなかったところを、推察する作業を行っている ・早口や複数の人との会話、話題が予想できない場面などでは、理解が難しくなったり、あきらめたりすることもある
<p>つながりにくい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の不足から、周囲の状況を把握しにくかったり、相手の話が分からずに誤解したりすることも多い ・対人関係を築く経験の不足もあり、結果として社会性が育ちにくい傾向が見られる ・極端に指示待ちだったり、逆に、自己中心的な行動を取る子と思われたりする傾向が見られる ・友達の会話に入りにくい、分からないことを尋ねにくい、集団の中で取り残されると感じる場面がある

②困難さに応じた支援の手立て

支援内容	支援の手立てと留意事項
<ul style="list-style-type: none"> ○聞こえにくさを補う ○音声（話し言葉）による情報が受け取りにくいことを理解し、場面に応じて、取り組む内容を変更したり、調整したりする ○聞こえにくさを補うための、視覚的な情報の提供 ○聞きにくさを改善するための、聴覚的な情報・環境の提供 ○言語経験が少ないことによる、体験と言葉の結びつきの弱さを補うための指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器等の活用（関係機関と連携し、先生が補聴器や人工内耳への理解を深めるとともに、他の幼児へ「大切なもの」であることの説明） ・視覚的な情報（目で見て分かるもの）で提示 ・身振り等の使用 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> *絵カードや写真カードを作成するなどして、園と家庭とが、身に付けさせたい言語について共通理解を図る *他の園児も身振り等でコミュニケーションを図ることができるよう、自然に働き掛ける </div>

<p>○情報が入らないことによる孤立感を感じさせないようなクラス雰囲気づくり</p>	<p>*補聴器等の使用において、日頃の観察が重要。不快感や故障などを当該幼児が説明することが難しいこともあるため、変化が見られたときは保護者へ報告する</p> <p>・座席の位置、話者の音量調整</p> <p>*視線は当該幼児と同じ高さが望ましい</p> <p>*周りの音になるべく邪魔されず、聞きやすくするため、当該幼児と向き合って話す（後ろから話し掛ける、後ろ向きで話すことは避ける）</p> <p>*話者は、話者の口や表情等が見えやすいように逆光でない位置になるようにする</p> <p>*話はできるだけ分かりやすく、複雑にならないようにする。正面から、口を大きめに開けて、ゆっくり話す。伝わったかどうかを確認することも大切。ただし、分かった？ と尋ねると分かったと答える傾向があるので、何が分かったかの質問を工夫することが望ましい</p> <p>*話し手に注目し続けることは、非常に疲れることや、注目したとしても全ての情報を正しく得ることは難しいことを理解して支援に当たる</p> <p>・机、椅子の脚のノイズ軽減対策（椅子の脚の先端にテニスボールを付けて、表面のフワフワした繊維で床との摩擦を減らす等）</p> <p>・必要に応じて、ワイヤレス補聴システム等の使用</p>
--	---

	<ul style="list-style-type: none"> * 言葉で説明されても分からないことも、一緒に遊びながら目で見て覚えることができる * 自分で経験したことを思い浮かべながら、相手に分かるように、言葉で説明する、質問されたことに答えるなどのやり取りを積み重ねる * 日常生活の中で行う、「かむ・飲み込む・なめる・吸う・吹く」などが、発音に必要な機能の向上に役立つことを理解し、できる範囲で働き掛ける
--	--

(4) 困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開する

先生の必要な支援の下で、聴覚障害のある幼児などが園での遊びや生活を楽しみ、他の幼児との関わりを広げていけるようにすることが大切です。他の幼児との関わりを深め、遊びを展開していく際に大切なことがあります。それは、聴覚障害のある幼児などの困難さに応じた支援を、他の幼児との関わりや集団の生活の中で自然に取り入れていくことです。しかし、その支援によって、他の幼児が遊びを楽しめなくなることは避ける必要があります。聴覚障害のある幼児などが、クラスの一員として他の幼児と共に遊びや生活を楽しめるようにすることが大切です。

コラム ケーキ屋さんごっこを通して（4歳児）

～言葉に身振り手振りを交えて思いを伝え合う～

支援のポイント

音声情報が得にくい幼児が他の幼児と情報を共有し遊びを楽しむためには、視覚情報を上手く活用したり、ゆっくり大きな声で話したりする必要があります。

他の幼児との関わりにおける先生の思い

幼児は、ごっこ遊びなどでは言葉でやり取りしています。難聴で他の幼児の言葉が分からないと、遊びを楽しむことができません。他の幼児も遊びに夢中になっているときに、難聴の幼児に分かるように話すことを何度も意識させるあまり、遊びが中断し楽しくなくなることは避けたいです。そこで、視覚情報を取り入れて、お店屋さんごっこをしている幼児皆が遊びを楽しむことができるようにしていきたいです。

ケーキ屋さんごっこの様子

B児は難聴で、他の幼児の声を聞き取ることが難しい幼児です。周囲が騒がしいとその傾向がより強くなります。最近、B児は、お母さんと一緒に商店街に買い物に行って、興味をもったようで、園でも買い物ごっこをしています。他の幼児も一緒に加わって遊んでいましたが、B児が他の幼児の発言を聞き取りにくそうにしていて、遊びを楽しむことができていないようです。すぐ近くで電車ごっこをしている幼児たちがいて、B児にとっては少しうるさいのかもしれませんが。また、他の幼児が、早口だったり、言葉だけで伝えたりしているので、B児には分かりにくいのかもかもしれません。

翌日、昨日の続きで買い物ごっこをやろうと言っているB児と他の幼児たち。買い物ごっこに使う用具を出し始めたので、先生は、近くで他の幼児が大声で遊んでいない広い場所の方がよいと考え、その場所を指差して、「あっちが広くていいんじゃない」と声を掛けました。そして、先生も幼児たちと一緒に移動しました。B児はケーキ屋さんの店員です。お店の棚に見立てた机には、イチゴのケーキ、チョコのケーキ、プリンケーキと、いろいろなケーキの絵が並んでいます。他の幼児が、「イチゴのをください」と言っていますが、B児は分かりません。先生が、他の幼児に、「ほしいものを手に取って大きな声でBちゃんに渡したらいいんじゃない」と声を掛けました。他の幼児がそのとおりにしたところ、B児は、「〇〇円です」と言いました。他の幼児も次々に欲しいケーキを言いました。次々と言われてもB児には聞き取れません。ある幼児が、「並んで順番に言うんだよ」と言うと、B児もたくさんケーキが売れて楽しそうです。楽しい雰囲気の後押しされて、普段は積極的に会話に参加しないB児も、「いらっしやい」「ありがとう」「チョコがおすすめ」

などと言って楽しんでいました。

他の幼児と共に遊びや生活を楽しむことができるような支援を考える

聴覚障害のある幼児などへは、音声聞こえやすいことと視覚情報の活用が大切です。そのため、周囲が静かであること、ゆっくりと大きな声で話すこと、身振り手振りやイラストの活用などを心掛けます。そうした配慮が遊びの中で他の幼児に取り入れられるように、先生はモデルとなったり、互いの思いをつなぐために声を掛けたりします。

B児のように、難聴の幼児は、音声をはっきりと聞き取ることができません。人口内耳を装着していても、私たちと同じように聞こえるとは限りません。そのため、発話も苦手な場合があります。そうしたことから、相手との意思伝達が難しく、引っ込み思案になる傾向があります。先生は、遊びを楽しみ、自ら他の幼児と関わってほしいと思い、幼児同士の思いをつないでいきます。そして、B児も他の幼児も、遊びの楽しさ、満足感や充足感を共有できるようにします。その際、「聞こえにくってどんなことか」、「頑張っても同じようにはできないこともある」ことについて、さりげなく理解を促すようにしていくとよいでしょう。また、身振り手振りやイラストなどの視覚情報のみでの意思伝達ではなく、言葉でのやり取りも組み合わせるようにしましょう。そうして、言葉を聞いたり話したりする機会を確保することで、難聴児は言語を獲得し、普段の生活でも発話するようになっていきます。困難さに応じた支援の下、そのときの難聴児のできる範囲で、難聴児の思いに寄り添いながら積み重ねていくことが大切です。